

日本の女性がスーツを着る時。

文・中野香織

会

社を代表してプレゼンテーションに臨む。海外のビジネス会議に出席する。部署を代表してスピーチをする。このような場面も増える。アラウンド管理職。世代の女性は、仕事着としていったい何を着るべきなのでしょう。政治家や起業家であれば華やかな原色のスーツやセットアップもありですが、会社の名を背負うビジネスウーマンであれば、そこまで目立つことは憚られるし、かといってお受験ママのような控えめなスーツというわけにもいきません。モードに走らず上品で、威厳を帯びすぎることなく信頼感を与えられるような服。相手に敬意を払い、自分自身も自信をもてる仕事服。そんな服を着こなすロールモデルは意外と少なく、指南するビジネス誌もファッション誌もほとんどありません。例外は常にありますが、男性がネイビーやダークグレーのビジネススーツで臨むような場面においては、女性もそれに準じたビジネス仕様のスーツで臨むのが好ましいでしょう。ビジネススーツがかくも世界で市民権を得たのは、同じようなスーツを着ることで、その人の背景に煩わされることなく、スムーズに仕事や交渉を進めることができる、という合理的な理由からです。同時に、同じような服に見えるからこそ、細部からその人の経済的な背景や個性、文化的な度合がおのずと見えてしまうという、人を見るのにとっても都合がいい服だからでもあります。

男性社会におけるビジネススーツがそのような役割をもつと理解したうえで、完全にその世界にとりこまれて

しまうのも考えものです。女性であることを否定しない自然な威厳を表現することもまた敬意を表されるためには必要だからです。女性らしさも含めた、より高次元の人間力を示すことができれば最高ですね。ちなみに、ビジネスシーンでも女性らしさを品よく表現できる部分は、首・手首・足首です。とりわけパンツスーツ着用の際には、この三か所を完全武装しすぎないように、どこか一か所でも自然な隙を作ると優しい雰囲気が出ます。

パンツであれ、スカートであれ、ワンピースとジャケットのセットアップであれ、そのような心意気でビジネススーツを選ぶときに、海外の基準も念頭に置いておきたいものです。職種や立場などによっても異なってくるので、あくまで目安としてですが、都市部のビジネスにおいては黒と茶系は避けたほうが無難です。黒は喪服や礼服またはトップモードとして着られる色であり、茶色はカントリーの色とされています（とりわけイギリスにおいて）。多くの国でNG扱いは、ビジネスや食事の最中に髪に手をもっていくことと、揺れるピアスやイヤリング。ヒールが擦り切れた磨かれていない靴。

以上、おおよその目安であり、決まりごとというわけではありません。原色や白を効果的に使うのもいいでしょう。仕事や交渉の場面において相手にどのような印象を与えたいのか、その戦略を明確にし、相手の視点に立ってご自身の全身をチェックしてOKと思えたならば、服のことはいったん放棄し、堂々と自信をもってミッション成功のために全力で邁進してください。

PROFILE

Kaori Nakano

服飾史家/明治大学特任教授。東京大学大学院修了、元英国ケンブリッジ大学客員研究員。過去2000年分の男女ファッション史から現代モードまでの研究、執筆・講演を行っている。著書『紳士の名品50』『モードとエロスと資本』『ダンディズムの系譜』『スーツの神話』ほか多数。公式HP www.kaori-nakano.com